平成2６年度第４回大阪府市文化振興会議　議事要旨

１　日　時　　平成26年１０月２３日（木）１６時３０分～１８時

２　場　所　　大阪府咲洲庁舎　４４階大会議室

３　出席委員　橋爪会長、中川副会長、池末委員、佐藤委員（ＡＣ部会長）、西村委員、山川委員、山口委員、山下委員

４　議　題

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

（２）その他

５　議事概要

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

　○佐藤部会長から、資料１「２０１５フェスティバル構想について」をもとに、アーツカウンシルの取組みついて大阪府市文化振興会議に報告。主な内容は次のとおり。

　　・大阪の課題は、文化的資源は豊富だが、ジャンル間のつながりや交流が弱く、文化力が見えにくく、都市魅力等に発展していないこと。そこで、大阪の文化的魅力を集約して伝える場としてフェスティバルを実施し、大阪のテロワール（文化的土壌）を表現する。フェスティバルをつくる過程で人のつながりを深め、新たな創造の基盤を耕す。他都市や海外からもアーティストや観客が集まるようなフェスティバルを目指したい。

・府市文化振興計画の三つの目標のうち、「文化創造の基盤づくり」を「都市魅力の創造」に結びつけることが狙い。２０２０年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、大阪で展開する文化プログラムの土台をつくる場にもしたい。

・1年目は大阪の文化的な土壌を掘り下げ、大阪の個性を新たな視点で発信すること、各分野の若手プロデューサー、キュレーターのネットワークをつくること、様々なフェスティバルやイベントをつなぐ情報発信をすることの三つが目標。

・10月末から大阪で活動する様々な分野の若手が集まって意見を交換するミーティングを開き、彼らの現場感覚を盛り込んだ「大阪らしいフェスティバル」を育てたい。

　　・一過性のイベントで終わらせずに2年、3年と継続させ、その過程を未来に生かしたい。そのために事業のプロセスをきちんと記録、検証する。2年目は異ジャンル間の交流を生かした新たな創造、3年目は大阪全域でのネットワーク型フェスティバルを目指す。

○委員から次のようなコメントがあった。

・文化振興計画の「大阪からアーティストが育つ」は、大阪出身者のみを意味しない。大阪を活動拠点とする人が増えることを期している。積極的に全国・全世界から、大阪を拠点としたい人を招き入れる努力が必要ではないか。状況を壊すパ ワーを持った人に外から来てもらう方が大阪のアーティストにチャンスが生まれるのではないか。

・大阪の文化として、刺激、おもしろい、楽しいの総量をあげること。域外から観光客を増やすことを考えればかなり大きな規模を目指さないといけない。

　プロモーションの方法や、京都、神戸との連携が必要。

・都市間競争における文化の重要性はますます高まっている。フェスティバルを実施するなら、都市魅力を高めるような設計が必要。

・大きなこと、楽しいことをやりたいが、税金を使う以上、10年後、20年後にどうなるかを考えなければ。

・人材を大阪にとどめること、ひきつけることが大切。観る人、楽しむ人を育てることが大切。アーティスト等の表現が社会にどう届くかをつくっていきたい。

・若手にチャンスを与えるのは良いことだが、大きな事業なのでベテランのサポートが必要。

・一般的に、プロジェクトが定着しない理由は、評価と歯止めができていないこと。PDCAのC（チェック）とA（アクト）が抜けると、プロジェクトは定着しない。評価は、事業が終わってからでは遅い。事前に現状把握が必要。

・プロデューサー、キュレーターに着目するのは新しい視点。

文化政策を考える上で、文化の産業化は必要。芸術文化に産業投資をするという発想。

一方では、消費ではなく、投資とするためのストック形成も重要。教育、福祉、地域の活性化などに生かすことも求められている。「アートは人を救う」という考えもある。アールブリュット、エイブルアートなど。

芸術文化の裾野を広げる時は、公平・平等の発想。波及効果を狙う時には、選択と集中が大事。

・今回のアーツカウンシルによる新しい文化事業は目玉となる。3年計画として、府市で予算化してほしい。

　既存のコンテンツをフェスティバル化する手法は、たとえばフランスのリヨンが宗教行事を「光のフェスティバル」とし、短期間に世界へ発信するところまで達した。韓国の釜山映画祭は、アジアに特化、産業化して他にない強みを得て成功。政府のサポートも得た。

　今回実施するにあたって、チャレンジする若手を選ぶ人には責任がある。どこかにプロポーザルや競争原理は必要。

・5年後くらいには、５０～１００万人来場するフェスティバルとして目指すべき。そもそも演芸は一瞬で消えていく文化だったが、フイルム等の発達で人はそれを残しておきたいと思うようになった。その一瞬の喜びを積み重ねていくことが文化の苗となる、そういう原点のようなものが感じられると素晴らしいなと思う。

・イベントを実施するには、プロモーションが重要。

・エディンバラフェスティバルでは、自由にチラシを配ったり、ポスターを張ることが可能なエリアがある。これには、公共空間の開放が必要。

・教育はチャージ、文化はディスチャージ。

産業振興、新しい街のバリューを高める文化振興、社会包摂に関する事業の検討も必要。

・「来る文化」と「行く文化」がある。「行く文化」へのセンシビリティーを高めるために「来る文化」（アウトリーチ）がある。また「来る文化」は、病院や施設などで拘束されているような子どもたちをわくわくさせることができる。

・社会包摂的に文化の力を生かす事業が、大阪市にはない。市の予算の話しになるが、大阪フィルハーモニー、文楽協会への助成金で合わせて約8千万円の減となった。全体予算を減らさないよう、新しい事業、社会・地域のための文化事業を。

（２）その他

　特になし。

（閉会）